広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第58号　2009　275－282

「優等学生」に対する特別措置とその類型

― 新たなエリート / リーダー養成を目指して ―

北　垣　郁　雄

（2009年10月６日受理）

The Treatment of Honors Student and the Framework: To Foster the New Elite/Leader

Ikuo Kitagaki

Abstract: This research aims to extract and propose a framework of the treatment for, so to speak, honors student based upon the relevant survey in domestic and abroad. First, we outline the examples of treating the honors student in several countries such as America, China, Japan and so forth. To note in America, many universities offer honors college/program then the statistical characteristics are summarized. Second, based upon the information above, we propose a framework consisting of three types of fostering, reward and exemption.

Key words: honors student, special treatment, system type of honors treatment
キーワード：優等学生，特別措置，優等措置に対する制度的類型

１．はじめに

高等教育のグローバル化や国際化が求められる一方で，国内では，18歳人口の減少，初年次教育としてのリメディアル，職業的レリヴァンスなど，学生の資質や量の変化に伴う大学改革が論議され，研究がなされている。学生に視点をおいた改革論議の中で，優秀な成績を収めたいわば「優等学生」に対して，経済面や教育面での特別措置を図ろうとする萌芽的な動きがある。学生のモティベーションを高めたり，国際的に活躍する学生の養成に向けた試みと見られる。「優等学生」に対する特別措置の研究は，我が国ではそれほど注目されてこなかっただけに，国内外で現にどのような特別措置が実施されているか，また，その実施例から如何なる類型が存在するのかは，高等教育改革の新たな方向性を探るという点で，重要な課題である（麻生・山内 2004，北垣・赤堀 2007：105-10）。

以上の問題意識の下に，本研究では，特別措置の現況を調査し，その結果から「優等学生」に対する特別措置の類型を抽出している。

特に，国外の調査に関連し，Honors college/program によるいわば優等教育[1] が広く実施されているアメリカに一つの重点をおいて，その概要や統計的特徴をまとめている。情報収集手段として，関連のホームページや文献を用いている。

高等教育のグローバル化に伴い，国際競争に積極的な国々は，優秀な学生を如何に伸ばすか，に重大な関心を払っている（Owens *et. al.* 2006）。本研究で求める類型は，今後，「優等学生」に対してどのような政策を採るべきかを検討するにあたっての，一つの基礎資料になることが期待される。

２．特別措置の現況

本論文では「学力・研究力等で『極めて優秀』と評価された学生」を，便宜上「優等学生」と称している

が，この呼称にはつぎのような経緯がある。（あとに詳述するが，）アメリカの多くの大学では，Honors students と称する優秀な学生に対する教育的特別措置として，Honors colleges や Honors program を用意している。ヨーロッパ，カナダ，中国の一部の大学についてもそうである。つまり，優秀な学生に対する特別措置の必要性は，部分的ではあるが，ある程度国際的に認知されている。それとともに，‘Honors’ が，そこでのキーワードになっている。一方，イギリスにおける Honors degree に関し，これに「優等学位」なる訳語を当てた例がある（有本 2007）。そのような国内外の状況に鑑みて，本節冒頭の呼称を行っている。同様の考察で，Honors education，Honors curriculum（Digby 2005）は，それぞれ優等教育，優等カリキュラムなどと訳すのが自然と思われる。一方，「優等生」は，既存の普通名詞ではあるが，広辞苑によると，多少皮肉が込められた用語であることが推察されるので，この使用は適切とは思われない。

「優等学生に対する特別措置」は，国によってその進展に相違があるようだ。

アメリカでは，中等教育としてのボーディングスクール（石角 2000）を含め，多くの大学内に設置されている Honors college/program などを通して，優秀な学習者の資質の伸長を重視する傾向がある。優等プログラムの領域的特徴としては，先端的研究力の強化を図るプログラム（Ashby-Martin 2007, Buckner 2007）や工学技術（Giazzoni 2007）に関するプログラムを準備する大学がある一方で，人類学（Lovata 2007），芸術（Register *et. al.* 2007），大学イベント（Wilson 2007），社会貢献（Parker, 2007），インターン，コミュニティ形成（Cobane *et. al.* 2007）などのプログラムを扱う大学もあり，全体として多岐にわたる。つまり，アメリカでの「優等企画」は，必ずしも科学技術の直接的進展を意図したものとは言い切れない。その点は，釣島（2004）の調査からも窺えるし，企画によってはリーダーシップを重視することもある（石角 2000）。

また，カナダのヴィクトリア大学，オランダのアムステルダム大学，同じくユトレヒト大学でも，優等プログラムが運営されている（Digby 2005）。

一方，中国でも，優等学生に対する関心が高く（紺野 2006），一柳（2003）は清華大学の事例を掲げている。そこでは，学生全体が競争的環境に晒さらされており，毎学期全学生の成績が実名で公表されるという。しかし，そのような狭義の学力だけでなく，長期的展望の下に，国際的な人脈や仲間の結束をも重視した施策を採っているのは，注目に値する。

アメリカの Honors college のように，一つの大学の中に特別な組織として優等学生を処遇するようなシステムは，中国では，浙江大学における竺可禎学院が知られている。現地調査によると，優等学院とも呼ぶべきその組織は，20年以上の歴史を有し，アメリカにおける Honors college の役割を期待して企画したものである。入学試験の成績でトップの５～８％の学生に，優等教育として２年間，所定の教育プログラムを受けさせている。理系（数学，物理等），工系（工学一般），文系（言語，管理，法律，歴史等）の３分野を用意し，その２年間のうちに専門領域を定めたあと，３年目から一般の学生に合流して各専門を極めるという方法を採っている。したがって，先端研究への参加体験よりも，基礎学力を重視した中国版 Honors college と見ることができよう。また，海外派遣，奨学金，寮生活などに対しても，一般学生よりも優遇する措置を採っている。

また，中国の多くの普通高等教育機関では，道徳・学業・体育面で優れた学生を「三好学生」と称して選抜し，奨学金などの優遇措置を採っている。さらに，社会的なリーダーに関わる「優秀学生幹部」，在学中の優秀な学業に対する「学業優秀学生」および卒業時の優秀な学業に対する「優秀卒業生」を選抜するシステムも存在する（中華人民共和国教育部 2005, 北京大学 2002）。

その他，シンガポール国立大学も，上記に準ずる University scholar program なる優等プログラムを有している（シンガポール国立大学 2007）。

一方，日本国内での上記に準ずる企画は，東北大学（2007）が挙げられる。2007年度に開設された東北大学国際高等研究教育推進機構は，異分野を融合した新たな研究の創出と人材育成に特色をもつ。修士１年次に，まず，新領域のフロントランナーによる特別の授業を受けさせる。そして，その履修状況をもとに特定数の学生を選別して，その後，奨学金や学会参加などを支援する計画を立てている。研究者養成のための経済支援と研究支援に重点をおいた企画と見られる。

特別措置としての経済支援は，いくつかの大学で観察される。大学独自の奨学金制度を設け，成績優秀者に対して，奨学金を学費減免という形で給付するなど，さまざまな工夫がある。日本工業大学（2007）や名古屋商科大学（2007）では，成績優秀者のみならず，社会貢献が評価された学生に対する表彰制度を設けている。広島大学（2007）では，2006年度から，新入生に対してエクセレントスチューデントを選別し，授業料免除などの措置を図っている。そこでは，入試成績の上位50名に，奨学金20万円を給付する。さらに，学部２年生以上に対しては，前年度の成績をもとに約80名を選別し，後期分の授業料を全額免除している。山口

大学でも，類似の免除制度がある。特に，国立大学でのそのような制度は，2004年度に国立大学が法人化され，予算の裁量権が拡大したことで可能になっている。一方，千葉大学では，1998年に飛び入学を実施している。数学と物理において，高校２年の時点で優秀と判定された生徒は３年を飛ばして入学できるようになっている。一種の減免措置である。さらに，立命館大学の専門職大学院，明治大学大学院，文京学院大学大学院でも，学部における飛び級を組み込んだ入試制度を設けている。

既述のように，アメリカでは，Honors student に対して広範囲な資質の養成に重点をおく傾向が感じられる。本研究では，Honors に「優等」という日本語訳を割り当てたが，日本語としての「優等」と英語としての Honors の概念格差には，今後，常に留意を払う必要があるだろう。

３．アメリカの Honors college/ program（優等学院／優等プログラム）

The National Collegiate Honors Council（NCHC）では，全米を中心に諸外国における Honors College 等の調査や評価活動（Otero *et. al.* 2005）を行っている。Digby（2005）は，その一部として，590弱の高等教育機関（調査校）を，設置区分，優等プログラムの規模等10個程度の観点項目で，調査リストにまとめている。また個々について，優等学院／プログラムの概要や学生数・教員数等の基礎統計をまとめている。本節では，調査リストの中から，アメリカに存する583校をとりあげ，そこに記載された観点項目を以下の(1)～(8)に列挙する。また各項目について頻度集計を行ったので，合わせて記載しておく。パーセント計算では，583を分母としている。

(1) 標準履修年限：優等学院／プログラムが２年制か４年制かの区別。４年制は493校（85％）で，２年制が93校（16％）である[2)]。

(2) 設置区分：州立（公立）大学か私立大学かの区別。州立（公立）大学が377校（65％）で，私立大学が202校（35％）である。

(3) 優等プログラムの分野限定：一般プログラム（General Honors Program）か分野別（または学科別）プログラム（Departmental Honors Program）。一般プログラムは，特定の専門分野を前提としない企画であって，例えば，University of Southern Maine では，古代の歴史，中世の精神的背景，科学革命の歴史など，古典的知識を含む優等プログラムを特徴としている。Departmental Honors Program は，特定の学問分野に特化したプログラムを指すが，Eastern Illinois University のように学生個人が興味を持つ一つのトピックを追究させるという場合もあるようだ。一般プログラムの校数が538（92％）で，分野別プログラムの校数が43（７％）である。また，双方を提供しているのが，123校（21％）である。

(4) 優等プログラムの規模：プログラムを受講する学生数に基づいた規模である。

（ア）小規模プログラム−100人未満。（205校，35％）

（イ）中規模プログラム−100人以上500人未満。（260校，45％）

（ウ）大規模プログラム−500人以上。（112校，19％）

プログラムの規模を用いて優等企画を特徴づけているのは，これに携わるディレクターの業務内容に質・量共に大きな違いがあることが一因と思われる。というのは，小規模プログラムの場合のディレクターは，学生やプログラムにかかわるほとんどのことを単独でこなさなければならないのに対し，大規模プログラムでは，複数の担当者の役割がかなり構造化されている。その結果，優等学院や優等プログラムのガイダンスでは，当該のディレクターやアドミニストレータに求められる資質が，規模別に論じられることが多いと思われるからである（Shuman 2006, Long 1995）。

(5) スカラーシップ：優等プログラムの受講者を対象とする奨学金制度があるかどうか。395校（68％）がその制度を有する。

(6) 転入可能性：当該優等学院／プログラムに途中から転入可能かどうか。Bridgewater State College のように，General Program に相当する Commonwealth Honors（４年間）と Departmental Program（後半の２年間だけ）の双方を提供しておき，途中から転入する学生には後者を推薦するような大学もある。転入可能なのが500校（86％）である。

(7) 黒人関連大学歴：歴史的に Black college としてカテゴリー分けされていたか。これに該当するのは，22校（４％）である。

(8) 助言の「格」：優等学生に対して助言を行う主体が，同輩レベルか，大学院レベルか，それともそれ以上の学術レベルかの区別。同輩レベルが58校（10％），大学院レベルが20校（３％），学術レベルが198校（34％）である。ただし，これらには重複してチェックしている調査校もある。ちなみに，15校が３つともチェックを行っている。

以上の８つの項目のほかに，後述の優等企画に関する特徴抽出の都合で，つぎの２項目も追加することにした。

(9) 優等企画の名称：当該優等カリキュラムがHonors collegeという名称の下になされているか，それともHonors programという名称の下かの区別である。Sederberg（2005：27-9）は，これらの間に決定的な相違や優劣を認めていない。Honors collegeは比較的新しく，Honors programは何十年もの間存在している。そして，古いものより新しいものが優れているとみなす必要はない，とも述べている。NCHCの調査によると，Honors collegeの60％が1994年以降に設立されており，また80％がHonors programという前身からスタートしている[3]。そこで，本研究では，名称がCollegeであるか否かは，優等プログラムにかかわる組織の成熟度を表す指標として用いている。

(10) 大学の質的評価：600校近くある大学で，その質的評価の高低は興味あることである。OwensとMeltzer（2006）は，アメリカの大学の中から，評価の高い大学を150校選抜している。本研究では，これを利用して，この項目を完成させた。

その他，我が国で頻繁に話題となるような最高位クラスの私立大学名が，先の調査リストには含まれていない，というのも一つの特徴である。

以上に述べた10項目に対する583大学のチェックリストをもとにして，多変量解析を行った。項目変数に割り当てる数値は以下のようである。

(1) 標準履修年限－　２年制：０，４年制：１
(2) 設置区分－　私立大学：０，州立（公立）大学：１
(3) 優等プログラムの（分野的）多様性－　分野別プログラムと一般プログラムに，それぞれ１ビットを割り当てて，０～３の数値で表現した[4]。
(4) 優等プログラムの規模－　小規模：０，中規模：１，大規模：２
(5) スカラーシップ－　なし：０，あり：１
(6) 転入可能性－　不可能：０，可能：１
(7) 黒人関連大学歴－　歴史無し：０，歴史あり：１
(8) 助言の「格」－　学術レベル，大学院レベル，同輩レベルに，それぞれ１ビットを割り当てて，０～７の数値で表現した[4]。
(9) 優等の名称－　Honors program：０，Honors college：１
(10) 大学の質的評価－　評価の高い大学との記載無し：０，同じく有り：１

以上の設定の下に，因子分析を行い，表１の結果を得た。同表では，因子負荷量の絶対値が0.5以上のものを太枠で囲っている。各因子軸は，次のように定めた。

第１因子は，「プログラムの規模」，「優等企画の名称」等の項目に対応する。既述のように，「優等企画の名称」は企画の成熟度に関連するので，その因子概念を「規模・成熟」と命名した。第２因子は，「設置区分」と「標準履修年限」である。そこで，因子概念を「設置区分・履修年限」とした。第３因子は，「黒人関連大学歴」，「優等プログラムの多様性」および「大学の質的評価」である。そこで，因子概念を「多様性・価値」とした[5]。第４因子は，「転入可能性」と「助言の『格』」である。そこで，因子概念を「学生対応」とした。

表１　アメリカの大学における優等企画に関する因子分析

項目	因子軸			
	１．規模・成熟	２．設置区分・履修年限	３．多様性・価値	４．学生対応
優等プログラムの規模	0.68	0.15	0.25	0.04
優等企画の名称	0.68	0.12	-0.16	-0.04
設置区分	0.22	0.81	0.07	-0.03
標準履修年限	0.51	-0.68	0.03	0.12
スカラーシップ	0.16	0.49	0.03	0.17
黒人関連大学歴	0.29	0.08	-0.74	-0.11
優等プログラムの専門性	0.16	0.12	0.53	-0.14
大学の質的評価	0.43	0.03	0.50	0.07
転入可能性	0.26	-0.01	0.12	0.74
助言の「格」	0.29	-0.12	0.18	-0.65
固有値	1.71	1.44	1.12	1.05
累積寄与率(%)	17.1	31.5	43.7	54.1
回転法：バリマックス回転				

これらの数個の概念は，アメリカの大学における優等教育を論ずる際のキーワードに資すると思われる。ちなみに，第１因子「規模・成熟」に対する因子得点で比較的高い値および低い値となる機関のうち，先の調査リストにおいて教育内容が明記されたものを取り出してみた。前者の例としては，ルイジアナ州のSouthern University and Agricultural and Mechanicaが挙げられることがわかっている。登録が400人以上に及び，インターンや留学などの優遇措置を設けている。また，後者には多くのcommunity collegeが該当することがわかっている。例えば，ペンシルベニア州のHarrisburg Area Community Collegeは登録が15人程度であり，現今の社会的課題に焦点をおきつつ

表２　優等学生に対する特別措置の類型

１．養成型（fostering）

内容・活動	事例
基礎学力	中国・浙江大学（理系，工系，文系）
古典的教養	University of Southern Maine
先端研究向け人材育成	東北大学国際高等研究教育推進機構（異分野融合研究）．Ashby-Martin，2007．Buckner，2007.
学問分野別内容	Giazzoni 2007，Lovata 2007，Register *et.al.* 2007，Eastern Illinois University
学内外活動参加	岡山大学（学生参加型 FD）*，Parker　2007, Wilson 2007
企画力	Wilson 2007
リーダーシップ	Wilson 2007
コミュニティ形成	Cobane *et.al.* 2007
学際的	Harris. Area Community College
（留学）	中国・浙江大学，Southern Univ. and Agricul. and Mechanica
（ベンチャー創業支援）	筑波大学*，慶應義塾大学*ほか

２．報奨型（reward）

内容・活動	事例
奨学金給付・貸与	多数
プロフィールの公開	中国・首都師範大学ほか
表彰	日本工業大学，名古屋商科大学ほか．北京大学，首都師範大学.
（留学）	中国・浙江大学，Southern Univ. and Agricul. and Mechanica
（ベンチャー創業支援）	筑波大学*，慶應義塾大学*ほか

３．減免型（exemption）

内容・活動	事例
授業料・寄付金	広島大学，山口大学ほか．アラスカ大学フェアバンクス校
寮費	―
飛び入学	千葉大学，立命館大学専門職大学院，明治大学大学院，文京学院大学大学院
科目履修，試験	―

学際的なカリキュラムを特徴とする。なお，第１因子得点に対して全大学を一元化すると，得点の高いところには University が，得点の低いところには Community college が集まるという傾向のあることがわかっている。

４．優等学生に対する特別措置の類型

前節までの調査結果から，主に，次の３点が明らかになる。

第一に，３節では，文献情報をもとに，アメリカでの優等学院／プログラムによる養成企画の統計的特徴を述べ，２節では，類似の企画が中国や日本の一部でなされていることを述べた。例えば，東北大学の事例は若手研究力が養成の対象であり，一方中国・浙江大学の事例は基礎学力が養成の対象であった。対象の相違が認められるものの，これら３つの国には，養成を主眼とする優等企画が大学内に存在するという共通点を確認できた。

第二に，日本の大学では，成績優秀な学生に対して学費免除を行う事例があることを述べた。また，（理数系に限定されるが）優秀な高校生に対していわゆる飛び入学をさせたり，在学生を大学院に飛び入学させるという例を紹介した。これらの事例には，優等学生に対し，普通の学生の場合には必要とされる履修期間や学費に関し，その一部（または全部）の減免を行うという共通性が見られた。一方，先の Digby（2005）の文献からは，優等性に基づく授業料減免措置がアラスカ大学フェアバンクス校など若干数に存在することが分かっているが，この類の措置を行う大学が全体的に少ないというのも，アメリカの一つの特徴と思われる[6)]。

第三に，２節では，優等学生に対して，奨学金を給付したり表彰を行う，日本や中国の事例を掲げた。３節では，アメリカでのその事例を紹介し，約70％の優等学院／プログラムが優等学生を対象としたスカラーシップを制度化していることを述べた。つまり，優等学生の評価に，報奨的手段を採るという共通性がみられた。特に，中国の大学で，優等学生のプロフィールをキャンパス内に写真付きで掲示するという措置を採っていることは，よく知られている（首都師範大学など）。

以上にまとめに基づいて，本研究では，優等学生に対する特別措置に関し，養成型，報奨型および減免型という３つのタイプから成る類型を提案する。その詳細は，表２のようにまとめることができる。同表には，これら３つのタイプに対し，それぞれ内容・活動と事例が掲げてある。内容・活動欄には，実際に行われているものを中心に，今後実施が想定されるものも含めてまとめている。事例欄には，本論文内にて事例に挙

げた大学名等を記載している。したがって，各内容・活動に対応する事例の内容がその代表例という意味ではない。また事例欄で，アスタリスクを付したものは，学生の選抜の仕方は不明である。奨学金と学費減免は，日本工業大学のように，これらをセットで提供している場合もある。したがって，報奨と減免は，事実上，部分的に同一とみなされる場合もある。一方，当該学生とその仕送り元である保護者との関係を考えると，これら２者は異なる概念とみなすこともできる。

養成型の中で学内外活動参加の欄に，学生参加型FDとある。これは，学生に大学活動に対する当事者意識の養成を図る場合もあるので，養成型に含めている（有本・北垣 2006：276-87）。また，留学とベンチャー創業は，養成型とも報奨型とも見られるので，かっこ書きとした。

養成型，報奨型，減免型から成る表１の類型は，図１の立方体による優等モデルとして視覚化することができる。

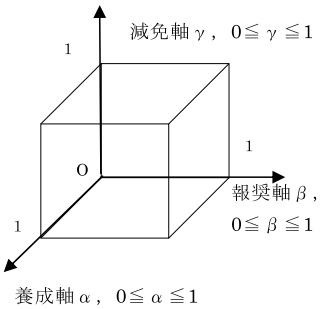

図１　学生の特別措置に関わる優等モデル

数多くの大学群に対して，これらの軸の意味づけを行うことができれば，特別措置の偏りや大学のクラスタのありさまを図的に示すことができる。例えば，各軸に当該タイプの実現度を０～１の連続量として割り当てたものとしよう。すると，日本の大学では，優等学生の養成面に特化した制度化が少ないから，αがほとんどゼロとみなされ，日本の大学群は$\beta-\gamma$平面内かそれに近い存在となろう。一方，Digby（2005）の文献では，アメリカのHonors college/programと各大学のスカラーシップを多数紹介しているが，学費減免の記述が少ない。したがって，記載の限りでは，$\alpha-\beta$平面内かその近辺の存在として視覚化できるはずである。そこに点在するアメリカ大学の優等企画については，３節に述べた表１の因子軸が観点となる。

５．考察～新たなエリート / リーダー養成～

ここ60年余にわたり，日本では，議論自体が伏せられる傾向の社会的テーマが存在した：エリート教育，軍事社会学（橋爪 2008）等。日本の教育でこれらを扱うのは，タブーだという。おかしなことだ。しかし最近になって，ようやく，一部の識者から関連の疑問が公けにされるようになった（遠山 2000；グレゴリー・クラーク 2000）。その背景には，国際化，グローバル化に伴って我が国が社会的変革を余儀なくされ，またそれとともに，外国においては極くあたりまえのことが人々に認知されるようになり，前節までに述べたような特別措置を無視した大学改革が考えにくくなったことが挙げられる。実際，養成的特別措置は，将来の日本を担うエリートやリーダー[7]の養成に大きな影響を与える課題のはずである（麻生ほか 2004）。筆者はその課題をとりあげる必要性を，つぎのように考えている。

日本では，「国際競争力のある大学改革に向けて」に準ずる文言が，しばしば大学の理念として謳われる。しかし，現実の問題として，学生集団の中で，将来熾烈な国際競争に当事者として関与する可能性が高いのは，最優秀の学生である。一方，大学全入時代と相成れば，大学の経営的諸般から，本来ならば入学不可能な学力の学生までもが入学し得る。そこで，学力的に多様な学生集団に対する授業活動を想像してみよう。一斉授業という制約下では，授業の内容と進度は，自ずと‘学力的重心’に合わせることになる。その場合，‘学力的重心’に近い学生にとっては，その学力と授業内容・進度とがほぼ整合する。しかし，それから遠く離れた低学力者と高学力者の２グループは，図２に示すように，いずれも不整合を来すことになる。

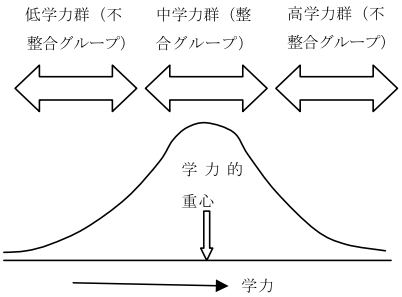

図２　学力の確率分布

このところ，入学後の学力不足を補うために，学内ではリメディアル措置が企画され，全国レベルではその不整合の解消や研究推進に向けた学術網も整備されてようだ（日本リメディアル教育学会 2009）。学内的

現況に合わせた個別の特別措置を図ろうとする重要な課題である。それならば，その対極にあるもう一方の不整合グループに対しても，固有の特別措置に向けた企画や学術網の整備がなされなければ，教育研究措置が公平とは言えないであろう。教育的処遇の機会均等を保証することが望まれる。

「優秀な学生は放っておけばよい」という意見がある。確かに，優秀な学生には，自律の能力を持ち合わせ，必要な学力や研究力を自ら磨こうとする全般的傾向があるかもしれない。それならば，そのような自主・自律の特色を生かして一段と力を伸ばすような養成手段やそのための資金投入の検討がなされて然るべきである。しかも，そのような学生は，将来，公共性が高く，また社会的影響力の強い職業に就く可能性が高い。したがって，狭義の学力・研究力だけでなく，普通の学力者にも増して，そのような職業に相応しい質・量の，知の社会的還元精神や幅広い教養が求められるはずである（北垣ほか 2007；藤原 2005）。だからこそ，優秀な学生に特化した養成的特別措置が必要なのであって，莫大な人的公共投資の対象と呼ぶに相応しい。健全なエリート／リーダー養成に向けた優等的特別措置は，今や国際化／グローバル化時代に対処するための不可避かつ緊急の課題である。高等教育的な関心が必須と思う。先のような優等学生の放置論は，教育的不作為が問われるだけでなく，授業料の部分的返還問題が生じ得る。

20世紀の戦後教育は，とうの昔に終った。21世紀には，それに相応しい教育が求められるはずである。

本研究は，以上のような問題意識の下に，我が国の高等教育研究に関して，優等学院への研究関心を高めるとの主旨を含めて論じた次第である。

6．おわりに

本研究では，優等学生にまつわる，若干の外国の活動を概観し，それに基づいて特別措置の類型化を行った。また，これから求められる新たなエリート養成に関する考察を行った。国際競争力が高まる中，我が国には，優秀な学生をさらに伸ばすような積極的な企画が求められ，本研究がその一助になることが期待される。

なお，本節で述べた類型化は，特別措置の制度化に関する議論の整理等にも利用できるものと思われる。本研究では，特別措置に関する多くの事例を基にして類型を抽出したが，今後，国内外機関への悉皆調査によって新たな類型が見いだされる可能性もあり，更なる継続調査が望まれる。

本研究の遂行にあたり，中国での調査は杭州師範大学叶林副教授に，また多変量解析については深圳大学師範学院李東林准教授のお世話になった。ここに，感謝の意を表したい。

【注】

1）Honors education を優等教育と訳して用いているが，この適切性については，２節で述べる。

2）２年制93と４年制493の校数を足しても，総計の583に一致しない。これは，双方にチェックした４校といずれにもチェックしていない１校が存在することに依るが，原因は不明である。

3）Sederberg（2005）は，調査に協力した回答者全員が College の第１の設立要因は‘より力のある学生（stronger students）’をリクルートすることであると回答した旨を述べている。

4）複数選択を可能にする項目変数に対する数値処理は，表３のビットの割り当てに基づく。

表３　ビットの割り当て方

(a)「優等プログラムの（分野的）多様性」

分野別プログラム	一般プログラム	優等プログラムの多様性
0	0	0
0	1	1
1	0	2
1	1	3

(b)「助言者の『格』」

学術レベル	大学院レベル	同輩レベル	助言者の「格」
0	0	0	0
0	0	1	1
0	1	0	2
0	1	1	3
1	0	0	4
1	0	1	5
1	1	0	6
1	1	1	7

5）表３(a)で，‘(分野的）多様性’とビットとの対応がいまひとつ明確とはいえない。そこで，試しに，最右欄の２と３を逆にして因子分析してみた。しかし，殆ど同じ結果が得られることが分かっている。

6）（優等性に基づくのではなく）州外居住者に比べ州内居住者に授業料減免措置を採る事例は珍しくない。

7）エリートとリーダーに関し，筆者はつぎのような

概念差異を感じている。エリートは，選抜性，高学力，特権性なる概念がより強く，リーダーは，大局的判断力，不屈，包容力なる概念がより強い。

【参考文献】

有本章・北垣郁雄, 2006,『大学力』, ミネルヴァ書房.

有本章（代表）2007,『学位に関するベンチマーク・ステートメント－英国・高等教育水準審査機関（QAA）の学科目別報告』，広島大学高等教育研究開発センター.

麻生誠・山内乾史，2004,『21世紀のエリート像』，学文社.

Ashby-Martin C., 2007, "Multi-Level Benefits of Using Research Journals in Honors", *Honors In Practice*, **3**：141-8.

Buckner, Ellen B., 2007, "Ten Steps to Honors Publication: How Students Can Prepare Their Honors Work for Publication", *Honors In Practice*, **3**：149-55.

Cobane, Craig T., and Thurman, Lindsey B., 2007, ""BBQ with Profs" and the Development of collegial Associations", *Honors In Practice*, **3**：129-37.

中華人民共和国教育部令第21号，2005,「普通高等教育機関学生管理規定」

Digby, Joan, 2005, *Peterson's smart choice; Honors programs& colleges*: Thomson Peterson's

藤原正彦，2005,：国家の品格，新潮新書.

Giazzoni, Michael, 2007, "The Fessenden Honors in Engineering Program", *Honors In Practice*, 3：79-82.

グレゴリー・クラーク：飛び入学，暫定入学の導入を（エリート教育は必要か，2000,；戦後教育のタブーに迫る），読売ぶっくれっと，pp.18-21.

橋爪大三郎：半歩遅れの読書術，2008. 9. 21,；講義のために読む「残酷な本質見極めた戦争論」，日本経済新聞.

広島大学，2007. 7. 30,
http://home.hiroshima-u.ac.jp/~houki/reiki/reiki_honbun/ax89204401.html

石角完爾，2000,『アメリカのスーパーエリート教育』，The Japan Times.

一柳哲央, 2003,『強い中国は「清華」が作る』ぶんか社.

北垣郁雄・赤堀侃司編著, 2007,『科学技術時代の教育』ミネルヴァ書房.

紺野大介，2006,『中国の頭脳 - 清華大学と北京大学』，朝日新聞社.

Long, Ada, 1995, *A Handbook For Honors Administrators*: National Collegiate Honors Council

Lovata, Troy R., 2007, "Learning a Practice Versus Learning to Be a Practitioner: Teaching Archaeology in an Honors Context", *Honors In Practice*, **3**：15-27.

名古屋商科大学，2007. 7. 30，http://nucb.jp/index.php?ID=488

日本リメディアル教育学会 , 2009. 9. 2,
http://www.remedial.jp/youshi.html

日本工業大学，2007. 9. 30,
http://www.nit.ac.jp/campuslife /shougaku.html

Otero, Rosalie and Spurrier, Robert., 2005, *Assessing and Evaluating Honors Programs and Honors Colleges*: National Collegiate Honors Council

Owens, Eric. Meltzer Tom, and the staff of the Princeton review, 2006, *America's best value colleges*: Random house, Inc..

Parker, Ann T., 2007, "Service Learning in the Honors Composition Classroom: What Difference Does It Make?", *Honors In Practice*, **3**：53-9.

北京大学学生奨励条例（2002年修訂），2007. 7. 30
http://www.pku.edu.cn/academic/mlxy/tw/tw/guizhangzhidu4.htm

Register, Brent.P., Bullington, Robert, and Thomas, Joe A., 2007, "Teaching Arts and Honors: Four Successful Syllabi", *Honors In Practice*, **3**：29-52.

Sederberg, Peter C., 2005, "Honors Programs and Honors Colleges:What's the Difference?", Digby Joan_ed., 2002, *Thomson: Peterson's smart choice; Honors programs& colleges*, : Thomson Peterson's

Schman, Samuel, 2006, *Beginning in Honors; A Handbook*：National Collegiate Honors Council

シンガポール国立大学，2007. 7. 30,
http://www.usp.nus.edu.sg/

東北大学，2007. 7. 30,
http://www.iiare.tohoku.ac.jp/education/student.html

遠山敦子，2000,：求められる真の改革（エリート教育は必要か；戦後教育のタブーに迫る），読売ぶっくれっと，pp.6-13.

No. 23釣島平三郎，2004,『アメリカ最強のエリート教育』，講談社＋α新書.

Wilson, Anne M., Blakley, Tyler D., Leciejewski, Kyathryn A., Sams, Michelle L., and Surber, Susan A., 2007, "Teaching an Honors Course Tied to a Large University Event", *Honors In Practice*, **3**：69-75.